

會員よりのたより

臺北支部便り

★春山行夫氏来る

「臺灣風物誌」執筆のため 總督府情報部の斡旋で來臺された氏は 着臺翌20日(16年四月) 午後西川滿氏の同道で本會を訪問、南天の星に就て質されたが、同夜再び矢野峰人、森於菟兩博士、島田教授等を伴ひ、會員と共に公會堂屋上で初夏の南の星の美觀を觀賞されるところがあつた。

★新入會員

本年度前半期に新しく迎へた會員の總數30名、内譯は臺北市内20名、地方6名、内地2名、滿洲1名、支那1名となつてゐる。

★七月例会

七月18日夜久し振りに公會堂にて開催、出席者20名。窪川會長は來る九月の日蝕で特に觀測上の注意をされる。一同は山本博士の天界 242號別刷を見入りながら靜聽21時半散會。

★日蝕協議會

迫り來る千載一遇の臺灣日蝕に萬全を期する爲に公式の打合會を八月27日20時より市公會堂にて開催した。博物館主任堀川氏をはじめ、子供理科の會、臺灣山岳會、趣味登山會等各種在北團體代表者約30名の出席あり、會長を中心に懇談を重ね22時散會。

★日蝕觀測隊歡迎會

東大天文學教室藤田良雄博士等は、八月18日午後本會を訪問されたが續いて第二班として寄臺の東京天文臺、奥田豐三、下保茂、佐藤友三の三氏及び先着の水澤緯度觀測所、服部忠彥、平三郎兩氏を迎へ、本會主催歡迎茶話會を九月3日20時より市公會堂中集會室に開催した。服部氏は最近の我國に於ける太陽物理學方面の發達を、下保氏は下保彗星發見當時の思ひ出話等を夫々語られ、一同和氣の裡に歡を盡くして22時散會。出席者30名、當日新聞には“下界離れの座談會”と題して可成り大きく書かれた。(蔡章獻記)

比島だより (第1信)

前略 内地を出發してはるばる南下して來ました。プラネタリウムで見た空をそのまゝこの肉眼に見て歡喜致して居ります。冷たい感じを以て接したオリオンもこゝでは頭上を涼しく通つて行き異様な氣持です。上陸直後は9時頃南

十字が上りましたが、今は8時頃になりました。

月の明るいことにも一驚、3日程の月齢でも黒々と影を投じます。若し南半球の星圖がありましたら御送付願ひ度く思ひます。参考書を宿舎に置いて來て了つて弱つて居ます。簡單乍ら近況御知らせ旁々御依頼迄。

會　員　比島派遣〇〇部隊〇〇隊　栗田正男

太　陽　課　幹　事　よ　り

山本會長殿。臺北市蔡氏に、黒點群の緯度と生成期間の相連關係の有無如何を究明致さる様依頼、快諾を得、數ヶ月後には、とに角一應の結論之あるものと思つ仕り候。

岐阜縣平井氏のk頃の決定法も、會長殿よりの御鞭撻を希求仕り居り候様存じ候。小生は、目下、群型の研究を開始候が、静岡市在住柴田様より多大の協力援助を賜り、是非とも完全なる様、努力、又御教導を切に願上申候。敬具

(六月10日　大石)

編　輯　室　よ　り

日本の天文家たちは實にエライものだ！　生きるか死ぬかの戦争をしてゐる中で、新しい彗星を發見したり、流星や、黄道光の觀測をやつたりしてゐる。あらゆる意味に於いて、英米側は顔色無しだらう。●長い間、机上に待機してゐた天文用語集も、又、續けて出すことにするが、今までのやうな書き方では、無趣味であるといふので、序でに、一語づつ簡單な解説文を載せて頂くことにした。かうすれば、初學者のための“読みもの”にもなる。勿論、これがために頁數が増して、従つて、完結がおくれるけれど、しかし其れだけの價值はあると思ふ。●井本氏の“遊星惑星”論は多くの人々が待望してゐた論文であつて、讀者の絶賛を博しつゝある。これによつて、學界の宿題も一應片付くと思ふ。●“午前”“午後”が廢されて、13時、21時の呼び聲が來る十月から一般社會に現れるらしい。愉快なことである。これについては、今後の時計屋さんのために、新しい文字盤の考案を募ることとする。奮つて應募して頂きたい。之れは日本の社會のためのみでない。世界中の時計のためである。●“午前”“午後”と共に、“インチ”も“マイル”も、華氏の寒暖計も皆ケン飛ばして、眞に新時代に適當した度量衡を一般社會が使用するやうになりたい。メートル法はフランスで發明されたもので、ドイツが率先して之れを公式に採用したものである。吾が國でもメートル同盟には入つてゐるが、今尙、英米流の頑固な輩があつて、之れを實行する勇氣と決斷力を缺いてゐるのは困つたものだ。